

オーストラリアやアメリカのように、移民をルーツに持つ住民が多数を占める国・地域に設置される「イミグレーション・ミュージアム（移民博物館）」——歴史背景の紹介やアート作品を通じて、同じ地域に暮らす異文化を持つ住民同士が相互理解を深める場として機能する。

今回は増加する外国人住民と日本人との出会いをもたらすべく、東京都足立区で行われているパイロット事業をご紹介します。

## イミグレーション・ミュージアム・東京 「フィリピンからの、ひとりひとり マキララー知り、会い、踊る—」



アートアクセスあだち 音まち千住の縁 事務局  
松岡 真弥

### 1 イミグレーション・ミュージアム・東京とは

「イミグレーション・ミュージアム・東京」（以下「IMM」）は、公募で集まった地域に暮らす市民が中心となり、外国人が語る日本での経験や疑問を材料にした作品制作を行うことによって、地域における日本人と外国人、そして外国人同士のネットワークを育てていくことを目指すプロジェクトです。オーストラリアやアメリカをはじめ多民族国家や移住者が多数を占める国や地域においては、各々の文化背景や歴史、生活様式を紹介し多文化共生を促進する目的で、イミグレーション・ミュージアム（移民博物館）が設置されており、展示やワークショップを通じた教育がなされています。そのような中で、美術家の岩井成昭氏が、各地のミュージアムをリサーチし、とりわけオーストラリア・メルボルンのミュージアムの企画展に感銘を受け、2010年に日本国内でIMMを立ち上げました。パイロット事業として2013年から東京都足立区の千住地域を舞台とした「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」（以下「音まち」）（※主催は足立区、東京都、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）、東京藝術大学音楽学部・大学院国際芸術創造研究科、NPO法人音まち計画）の事業の一環として活動を継続し

ています。

ミュージアムの名を掲げながらも、歴史紹介や調度品など常設の展示はなく、一人ひとりの個人的な経験が作品となる本プロジェクトでは、既存の博物館施設に対するアンチテーゼの意味も含ませながら、アーティストだけではなく、市民との相互のコミュニケーションツールを生み出すことが目的となっています。まず市民有志メンバー自らが制作発表をする機会を持ち、同じまちに暮らす外国人の個々の生活に染み込んだリアルな文化を芸術表現にすること。次に、それによって表現者、市民、外国人など、普段は社会的に異なる領域に暮らす人々の感性が互いに誘発されること。そして、その状況を地域に紹介することで、外国人と日本人の交流と相互理解を深め、アートを通じた新たな地域文化を創造すること。これらがIMMの大きな目的です。また理念として、〈適応（いろいろな工夫、意識的な段階）・保持（変わらず守り続けるもの）・融合（いつの間にか日本の生活に馴染んでいるもの、無意識の段階）〉の3つのキーワードを掲げています。

### 2 フィリピンコミュニティとの交流 におけるこれまでのあゆみ

さて、2016年にIMMで開催した「フィリピ

ンからの、ひとりひとり マキララ―知り、会い、踊る―」(以下「マキララ」。フィリピン語で「知り合う」の意)は、足立区のカトリック梅田教会に集うフィリピンコミュニティの人々との協働を目指して行いました。足立区は東京23区の中でフィリピン人の居住者数が現在最も多い地域です。フィリピンでは国民の90パーセントがカトリック信者で、日本に暮らすフィリピン出身者たちにとっても、教会は、同郷の友人たちと自分たちの言語で話すことができる心の拠り所として機能しています。区内で外国人コミュニティとの出会いを見つける際、教会への訪問は必須のことでした。

IMMのメンバーが2014年に梅田教会へ出向き、在日フィリピン人の方たちと交流を始め、市民交流プロジェクトとして2015年2月に「イミグレーション・ミュージアム・東京―出会いのかたち―」としてパフォーマンス&トークイベント、展覧会を開催しました。その際は、一般参加者とフィリピンコミュニティの関係性を主眼において、教会を会場としましたが、イベントの入場者の中にフィリピン人は少なく、交流はかないませんでした。また、同年9月には「イミグレーション・ミュージアム・東京―普段着の出来事―」を開催し、梅田教会に通い交流を続ける学生スタッフが主体となり、出会ったフィリピン人の方たちを展示会場に呼び込むような仕掛けをして促しましたが、作品を共に制作したり、企画を行うには至りませんでした。

このように、梅田教会のフィリピンコミュニティとのつながりは継続されていたものの、作品に昇華するには一歩至らないという前年度までの経験と課題をふまえ、2016年度は、新たにアーティストを招聘して作品制作に取り組んだ結果、「マキララ」は映像展示とワークショップとパーティーとを3本立てで

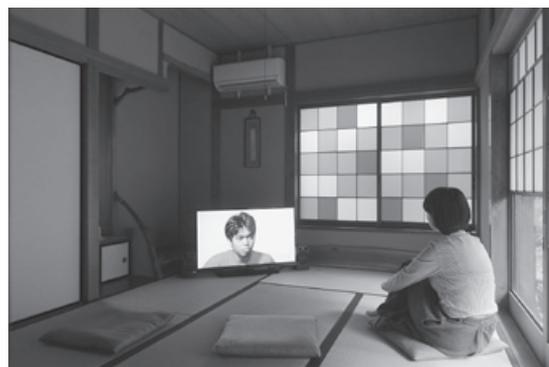
行うものとなりました。

### 3 「知り、会い、踊る」

作品の主軸とした映像展示「知る：Their history, to be our story」には、演出家の阿部初美氏を招聘。映像に富田了平氏、会場構成に日本大学建築学科の佐藤慎也研究室を迎え、アーティストの視点と手法で構成していくこととしたのです。在日外国人個々のライフストーリーに着目し、フィリピンでの生活から渡日、そして現在に至るまでを尋ねていきました。

協力者として、リサーチ段階のインタビューを15名程の在日フィリピン人の方に引き受けていただき、実際に展示した映像作品には9名が出演しました。その他、普段の会話の流れからのインタビューや、個人で開催するパーティー、教会の行事に関連して家に招いてくださった場面なども含めると、20名以上の方たちが今回の映像展示に関わってくださっています。

映像展示とワークショップの会場となった「<sup>なちやう</sup>仲町の家」は、音まちが活動拠点とする古民家で、本企画が展示発表の場として使用する初めての機会、いわば柿落としとなりました。インタビュー映像を流すにあたり、テレビモニターをインスタレーション形式で、10畳・8畳・6畳と台所の4つの部屋に点在させました。佐藤氏の会場構成によって、縁側や離れの部屋など日本家屋の特徴を活かし、家の



映像展示 (写真：富田了平)

中に流れるゆったりした空気感と、聖歌の響く教会の雰囲気を重ね合わせたのです。内容の濃いインタビュー映像を、ただ「見る」のではなく、一人ひとりに向き合って耳を傾けることを促し、在日フィリピン人の生活や文化背景のみならず、彼らの思いを伝えるものとなりました。また、教会で聖歌隊が人気のデザート「ハロハロ」をつくっている風景や、教会に来られない人の家々へマリア像を運んで執り行う「ブロック・ロザリー」という儀式及びその移動中の様子など、日常の風景を収めた映像も織り交ぜ、地域に隣り合って生活していることを実感できる形を目指しました。

映像とともに展示の一要素であった「暮らしのコーナー」では、IMMでこれまで行ってきた市民交流の要素を引き継ぎ、一般参加者による作品を発表しました。「住まい」や「食」を切り口に、建築設計士であるIMMメンバーがフィリピンと日本の家について、馴染みのあるところや違和感のある部分などの比較をインタビューからまとめたり、イラストレーターであるメンバーがフィリピンの食文化を手描きのイラストで紹介したりと、それぞれ冊子を作成しました。その場で手にとって読んでもらったり、フリーペーパーの形で配布したりもしました。IMMは、在日外国人との交流に関心のある一般参加メンバーにリサーチフィールドを紹介するなど、今回対象となったフィリピンコミュニティと彼らの間のコミュニケーションをサポートした形になっています。

これらの展示作品を見た来場者と、在日外国人の方との対話を生み出すため、阿部氏のファシリテートにより「会う：なにが気になる？」と題してワークショップを試みたほか、アンケートで書き込まれたメッセージを出演者に読んでもらいました。

## 4 交流の場づくり

「マキララ」で展示と同時に一晩開催した手づくりのパーティー「踊る：フィリパピボ!!」には、普段教会に通っていない在日フィリピン人の方たちも誘い合って多く訪れ、近隣地域に暮らす人たちとの新たな出会いが生まれました。教会に足繁く通った学生スタッフが、誰でもあたたかく迎え入れて包み込む、フィリピン流のパーティー文化に着目し、教会内外で知り得たバルーンやカラフルな布での装飾や食事の盛り付けなどの要素をふんだんに盛り込み、さまざまな人々に開かれたパーティーを計画しました。フィリピンの伝統的なダンス「ティニクリン」を在日フィリピン人のこどもたちが習い3世代で披露したり、IMMメンバーがレシピを聞いた料理を振る舞ったり、フィリピン文化の紹介は欠かせません。しかし、当日はそうした表面的な異文化交流に留まらず、音楽や料理で温まった会場の熱気の中、誰もが踊る光景が繰り広げられました。

映像展示には、近隣地域の方をはじめとして、約240名の来場があり、在日外国人の暮らしについて「知る」機会となり、さらにパーティーでは、120名にのぼる来場者と50名近くのスタッフが集まり、まるで溶き卵のように混ざり合いました。初めて会った人同士で連絡先を交換したり、教会を見学に行くことや、別の場所で会う約束を交わす人たちもいて、



フィリパピボ!! (写真：富田了平)

この先にもつながる交流の場になったことを実感しています。

今回の成果の背景には、IMMメンバーやスタッフがフィリピンコミュニティに真摯に向き合い、関係性を丁寧に構築することを最重視してきたことが挙げられます。例えばパーティーの企画段階では、教会内外でフィリピンの方と交流を持ち、都内のフェスティバルに足を運んでみたり、フィリピン料理のレストランで食事をしたり、店主の方と一緒にカラオケを歌ったり踊ったりしながら、文化についてリサーチを行いました。段々と経験が蓄えられ、その知識から質問を重ねていくことでフィリピンコミュニティの人々からの信頼を得ることができたように思われます。また、パーティー準備の過程では、リハーサルを呼びかけたり、料理の相談をしたりしてフィリピン人の方たちへ積極的に誘いかけることを心がけました。その結果、各メンバーとコミュニティの人々との間に強固な結びつきが生まれ、当日はパーティーを「自分ごと」として捉えた上で、来場者を迎え入れるホスピタリティーを発揮する方が多く見受けられました。

映像展示とパーティーという、異なる視点と手法で、フィリピンコミュニティを伝える二つの企画を開催したことから、一面的ではない異文化との出会い方を提案できたと考えています。〈作品や交流の「場」が媒介とな

り、同じ地域に暮らしながらも知り合う機会の少なかった日本人と、ニューカマーである在日外国人が互いの暮らしに思いを馳せること〉〈共に生きてゆく未来について考える機会をもつこと〉これらの目的を少しずつかなえられたことが、参加者たちの感想からもうかがえます。

各々の関係性の上に構成された「マキララ」は、フィリピンコミュニティ一人ひとりの個性を引き出し、その魅力を来場者・参加者たちと共有することにつながっていきました。IMMは今も施設や固有の展示形態を持たずに活動を展開しており、在留外国人とアーティストや参加メンバーとの関係性によって、活動の幅はいかようにも変容していく可能性があります。今後はメルボルンのミュージアムとの交流も行い、ヒントを得ながら、新たなコミュニケーションツールを生み出していくこと、また、アートを通じて多文化共生への視点が、さらに個々人へと広がっていくことを目指していきます。



ワークショップ (写真：富田了平)

#### 著者略歴

松岡 真弥 (まつおか・まや)

舞台制作を中心に、舞踏、演劇、音楽、美術展示などクロスジャンルのアーツマネジメントに関わる。東京藝術大学音楽環境創造科卒。彩の国さいたま芸術劇場、旧アサヒ・アートスクエア勤務を経て、現職。2016年から「イミグレーション・ミュージアム・東京」を担当。